走れメロス

もっちり

もちこ

理想を求める人間の心、それはいつの時代にも共通するものではないだろうか。そしてそれは、現実が醜けれぱ醜いほど強く現われるのではないだろうか。

『走れメロス』を読んで私がまっ先に考えたことは、メロスは、作者の理想、私たち人間の理想の姿を描いたのではないかということだった。人を信じることのできなくなった王に人の真実の存するところを見せようと必死になって走り続けるメフス。そのメロスの姿こそ、人間の夢ではないかと思う。

名誉も利益も命の大切ささえも忘れて走るメロス。その中に作者はきっと自分の理想の像を見出していたにちがいない。また、自分が持つことのできない真の友情をセリヌンティウスとの間に持たせたにちがいない。